内日吉には、政庁確認されず

県教委が進めていた、第十四次「土佐国衙（こくが）跡確認調査」が終わり十一月十三日、現地説明会が行われました。今回の発掘で、最も有力とされていた内日吉地区には、政庁の存在を予想することは難しいという結論に達しました。

◇第14次国衙跡発掘調査◇

宮衛に付随する建物跡が発見された内日吉の現地

調査は十月一日から始まり、比江内日吉一ノ坪の四百二十四平方㍍を発掘。

出土遺物は約一万点。杯、甕（かめ）などの土師質（はじしつ）土器や須恵器、青磁など。遺構は、一棟の竪穴住居跡、五棟の掘立柱建物跡など。

竪穴住居跡は、出土遺物が少なくはっきりした時期はわかりませんが、この付近には六世紀末から七世紀初頭の住居址があることから、その時期（古墳時代）のもので、国衙ができる前にできたものと思われています。

五棟の掘立柱建物跡は、その柱穴がすべて方形の掘り方で、規模からみても、宮衛に付随する建物跡と推定され、うち四棟は、棟方向が真北にほぼ平行か垂直で、他の一棟より古く、八世紀～九世紀初頭のものと考えられています。

一般に、政庁と呼ばれる部分は一辺が九十㍍以上はあり、正殿、前殿、後殿、東西の脇殿によって構成されています。

今までの調査で、内日吉地区で十五棟の宮衛に付随する建物跡を確認しましたが、政庁内の建物とするには規模的に小さく、むしろ政庁外郭の宮衛群と考えるのが適当とのことです。その結果、一般的な政庁の規模から考えても、未調査の部分を含め、この内日吉地区には、政庁がほぼ存在しないことが確認されました。

県教委では今後、本年度の二次調査として、内日吉の北方二カ所に調査区を設定し、線的調査（トレンチ調査）方法で発掘していく予定です。

国分寺に○○○
高木さん（虚子の五女）の句碑完成

薄もやのこもる四国霊場二十九番札所国分寺（林広裕住職）で十一月十一日、高浜虚子の五女高木晴子さんの句碑が完成、高木さんを迎え、俳人など百二十人が参加し盛大に除幕式が行われました。

高木さんは、神奈川県鎌倉市に住む俳人で、昭和五十三年から遍路の旅など三度国分寺を訪れるうち、国分を心のふるさとと感じられ、そんな縁で虚子が愛用していた鼓を国分寺へ贈り、虚子と、いと夫人の永代供養を依頼しました。そんな高木さんの気持ちを長く記念しようと、句碑建立となったもの。

仁淀川の赤石を使った句碑には、五十七年の遍路の旅で作られた〝来し方を　行く方を　草臥かな〟の句が刻まれています。紀貫之邸跡には〝土佐日記　懐にあり散る桜〟と虚子の句碑も建っており、ここ国府の地に虚子ゆかりの碑が二つとなりました。

式では、林住職らが法要を行い除幕。中沢秀夫県教育長、小笠原市長らの祝辞の後、高木さんが「皆さんと、暖かい交わりができたこの幸せは、父が与えてくれたものと思います」と、感謝の言葉を述べていました。

午後からは記念俳句会が開かれ、集まった人たちは、こけの美しい庭で、俳句を楽しんでいました。

完成した句碑を見る高木晴子さん（写真中央）